

LE FIGARO

101
No. 4000 — 7 Mars — 1909
Paris, le 7 Mars 1909
Publié par G. LAFONT
10, rue de la Harpe, Paris
Téléphone 210-211
Abonnement en France 10 francs
Etranger 12 francs
L'abonnement est payable d'avance
à l'adresse ci-dessus

COMMUNIQUÉS
M. le Ministre de l'Intérieur a l'honneur de vous adresser ci-joint le rapport que vous lui avez adressé le 25 février 1909, en réponse à sa lettre du 15 février 1909, relative à la situation de la commune de ...

Le Futurisme

Le futurisme est un mouvement artistique qui se caractérise par son rejet de la perspective traditionnelle et son intérêt pour le mouvement et la vitesse. Les futuristes cherchent à représenter le monde tel qu'il est, avec ses lignes dynamiques et ses formes changeantes. Ils utilisent des couleurs vives et des lignes anguleuses pour créer une sensation de mouvement et de vitesse. Le futurisme est né en Italie au début du 20e siècle et a influencé de nombreux artistes et écrivains.

Les Opéras
L'Opéra de Paris a donné hier soir une représentation de l'opéra ... Le public a été très impressionné par la beauté de la voix de la chanteuse principale et par la puissance de l'orchestre.

LA VIE DE PARIS

Le lit à l'Hygiène, l'air
L'hygiène est une préoccupation majeure pour les Parisiens. Les experts recommandent de bien aérer les pièces et de changer régulièrement les draps. L'air pur est essentiel pour maintenir une bonne santé, surtout en cette saison où les maladies respiratoires sont plus fréquentes.

Les Opéras
L'Opéra de Paris a donné hier soir une représentation de l'opéra ... Le public a été très impressionné par la beauté de la voix de la chanteuse principale et par la puissance de l'orchestre.

LA VIE DE PARIS

Le lit à l'Hygiène, l'air
L'hygiène est une préoccupation majeure pour les Parisiens. Les experts recommandent de bien aérer les pièces et de changer régulièrement les draps. L'air pur est essentiel pour maintenir une bonne santé, surtout en cette saison où les maladies respiratoires sont plus fréquentes.

Les Opéras
L'Opéra de Paris a donné hier soir une représentation de l'opéra ... Le public a été très impressionné par la beauté de la voix de la chanteuse principale et par la puissance de l'orchestre.

LA VIE DE PARIS

Le lit à l'Hygiène, l'air
L'hygiène est une préoccupation majeure pour les Parisiens. Les experts recommandent de bien aérer les pièces et de changer régulièrement les draps. L'air pur est essentiel pour maintenir une bonne santé, surtout en cette saison où les maladies respiratoires sont plus fréquentes.

Les Opéras
L'Opéra de Paris a donné hier soir une représentation de l'opéra ... Le public a été très impressionné par la beauté de la voix de la chanteuse principale et par la puissance de l'orchestre.

LA VIE DE PARIS

Le lit à l'Hygiène, l'air
L'hygiène est une préoccupation majeure pour les Parisiens. Les experts recommandent de bien aérer les pièces et de changer régulièrement les draps. L'air pur est essentiel pour maintenir une bonne santé, surtout en cette saison où les maladies respiratoires sont plus fréquentes.

Echos

Les Opéras
L'Opéra de Paris a donné hier soir une représentation de l'opéra ... Le public a été très impressionné par la beauté de la voix de la chanteuse principale et par la puissance de l'orchestre.

未来派創立宣言

未来派創立宣言

われわれ——わたしとわたしの友人たち——
は、ネオン型ランプの下でひと晩じゅう起きていた。それらの真鍮製ドームには、明り穴が星のようにもりばめられており、まるでわれわれの魂のようだった。なぜなら、これらのドームはわれわれの魂同様、電気仕掛けの心臓部が受ける内側からの光によって照射されていたからだ。われわれは、先祖伝来の無気力を豪勢な東洋の威厳のうでで長いこと踏みつけた。そして、論理の極限まで議論をかきねながら、何枚もの紙が黒くなるまで錯乱した文章を書きなぐった。

われわれの胸は大きな自信でふくらんでいた。そんな時間に目を覚まし起きているのはわれわれしかおらず、われわれ自身が、天上の野営地から歸きする星の敵軍に対峙した前衛部隊か、甚高の燈台になったような気がしていたからだ。われわれのほかにも目を覚ましていた者といえば、巨大な船の灼熱のボイラーの扉で動きまわる火夫や、猛り狂ったように疾走する機関車の、燃えたぎるはらわたのなかをかきまわす黒い亡霊や、街の壁ぎわにそって、まごもなく手をばたつかせる千鳥足の酔っ払いだけだった。

多量の光に輝き、揺れながら通り過ぎる巨大な2階建て路面電車のすさまじい騒音に、われわれは不意をつかれた。それは、氾濫したボーイが突然、春日の村落を揺り動かし根

こそぎにして、洪水の渦にまきこみながら流を下り、海まで運びさるさまに似ていた。

それから静寂がさらに深まった。しかしわれわれが、力なくつぶやくような古い運河の折りや、湿った植物の根のうでで壊れかかった建物の骨組みがきしむ音を聞いているあいだも、窓の下からは貪欲な自動車の咆哮がすぐに聞こえてきた。

行こう、とわたしは言った。行こう、友よ！ 出発しよう！ ついに、神話と神秘的な理想が凌駕された。われわれは、ケンタウロスの誕生に立ち会おうとしているのだ。そしてわれわれはまもなく生まれたての天使が飛翔するのを見るだろう！ ……人生の尿を掃すぶって、蠟燭や掛けがねを試してみなくてはならないだろう！ ……出発しよう！ さあ、地上には夜明けが訪れたばかり！ われわれの千年の間に最初の戦いを挑む、太陽の赤い剣の輝きに匹敵するものなど何もない……。

われわれは息の荒い3頭の野獣〔フィガロ版では、3台の車〕に近づいて、その熱い胸をやさしくさすった。わたしは、檻のなかの死体のように、わたしの車のうえに横たわったが、すぐに起き上がり、わたしの腹を切り裂くギロチンの刃のようなハンドルをにぎった。

怒り狂う狂乱のほうきがわれわれをわれわれ自身から強引に引き離し、急流の底のように深く険しい街路へとかりたてた。窓ガラスの奥の弱々しいランプがあちこちで、われわれ

のはかない肉眼がつくりあげる偽りの数学を信じてはいけなとわれわれに教えていた。

わたしは叫んだ。嗅覚だ。野獣たちには、嗅覚だけで十分だ!

われわれは若き獅子のように、黒い毛並みに青白い十字の染みのついた死神を追跡したが、死神は、呼吸をして生きているかのような紫がかった広大な空を駆け抜けようとしていた。

しかしわれわれには、高貴な姿が雲の高さまで達する理想的な恋人も、ビザンチンの繊細な指輪のようにゆがんだわれわれの亡骸を捧げるべき、冷酷な女王もいなかったのだ! われわれのあまりに重い勇気から自らを解放しようという願望以外に、われわれを死にかりたてるものは何もなかったのだ!

そしてわれわれは、家々の敷居のうえてまわっている番犬を、まるでアイロンでプレスされる襟のように、われわれの過熱したタイヤで踏みつぶしながら疾走した。おとなしくなった死神は、曲がり角のたびにわたしを追い抜いてやさしく手をさしだした。また、水たまりに来るたびに、哀願するようなやさしいまなざしをわたしに向けながら、ときどき耳障りな歯ざしりをして地に横たわっていた。

うとましい貝殻をやぶるように、思慮分別から抜け出し、自信が加味された果実のように、よじれた口を大きくあける風のなかへ飛びこもう! 未知なる世界へ、われわれ自身をその糧として捧げよう、絶望のためではなく、ただ、不条理な世界の深い井戸をみたくすために!

これらのことばを言ってしまつとすぐに、自分の尻尾を噛もうとする犬とまったくおなじばかげた情熱にかられ、わたしはとっさに後ろを振り返ったが、そこへ急に、自転車に乗った二人の男がわたしにぶつかってきた。彼らはまる

で、ともに説得力はあるが、また平穏な二つの理屈のように、わたしの前でわたしを非難した。彼らは愚かにもテクノロジーに陥り、わたしの進路で論争をしていた。何てめんどうな! ああ! ……わたしは怒り、嫌悪感から、溝のなかに突進してひっくりかえした。

おお、泥水でほとんどあふれそうなのさ! 側溝よ! 工場の美しい側溝よ! 体を洗って! おまえの泥土をわたしは貪り食ったが、わたしは、スーダン人のわたしの乳母の神聖な乳房を思い出させた。わたし———古い臭いほろきれ———が転倒した車から転がると、喜びで熱くなった鉄によって心算されるように感じて、心地よかった。

釣糸を手にした漁師と前風病みの哲学者たちの一群が、もうこの驚くべき出来事まわりで騒いでいた。その人たちは、平和主義でも細心の注意をはらって、高度な巨大な鉄の網をもちい、陸に乗り上げた。なびきながらのわたしの自動車を吊り上げた。わたしの車はゆっくりと溝から現れ、その洗練された重い車体と、柔らかい適なシートは、うるこのように水底に覆われていた。

彼らはわたしの美しい股が死んだかと思っていたが、股をよみがえらすには、かたひと撫でて十分だった。そしてよみがえりなや股は、また力強くひれを立てて立っていたのだ!

それから、工場の美味なる泥———無益な汗、大気の煤の混合物———をおおわれたわれわれは、打撲を負った帯を巻いていたが、隠すことなく、震るる全人類に対し、われわれの最終の宣言を伝えたのだ。

未来派宣言

1. われわれは、危険への愛と、活力と無謀の野性をうたいたい。

2. 勇気、大胆、反乱がわれわれの詩の本質的な要素となるだろう。

3. 文字は今日まで沈思黙考、恍惚感、眠りを賞讃してきた。われわれは攻撃的な運動、熱を帯びた平服、かけ足、宙返り、びんた、げんこつを賞讃したい。

4. 世界の偉大さは、ある新しい美によって豊かになったとわれわれは断言しよう。それは速度の美である。爆風のような息を吐く蛇に似た美しいパイプで飾られたボンネットのあるレーシングカー———散弾のうえを走っているように、うなりをあげる自動車は、(サモトラケのニケ)よりも美しい。

5. われわれはハンドルを握る男を賛美したい。ハンドルの理想のシャフトは地球を貫通し、地球もまた、軌道というサーキットを疾走している。

6. 詩人は、情熱をもって、華麗に、また気前よく、力のかぎりをつくして原始的な要素の熱狂を最大とせなくてはならない。

7. 戦争のなかにしか、もはや美はない。攻撃的な性格をもたない作品に傑作はありえない。詩は、未知の力を人間の前に屈伏させるための、未知の力に対する荒々しい攻撃として把握されねばならない。

8. われわれは幾世紀もの過去の崖っぷちに立っている! ……もしわれわれが不可能の神秘の扉を突き破ろうとするなら、なぜ後ろをふりかえるのか? 時間と空間はきのう死んだ。われわれはすでに、いたるところに存在する永遠の速度を創造したのだから、絶対のなかにもう生きていたのだ。

9. われわれは、世界の唯一の健康法である

戦争、軍国主義、愛国主義、無政府主義者の破壊的な行動、命を犠牲にできる美しい理想、そして女性蔑視に栄光を与えたい。

10. われわれは、美術館と図書館と各種アカデミーを破壊し、道徳主義と女性賛美主義と、すべての日和見的で功利的な卑屈さと戦いたい。

11. われわれは、労働、娯楽、暴動に揺り動かされる大群衆をうたうだろう。近代的な大都市における革命の多彩で多音声的な潮流をうたうだろう。荒々しい電気の月によって煌々と照らし出された造船所や兵器工場の、震えるような夜の熱気をうたうだろう。煙を吐き出す蛇を飲みこむ大食いの駅、吐き出す煙のよじれた糸で雲から吊るされているように見える工場、日にさらされてナイフのように光る川をまたぐ巨人の体操選手に似た橋、水平線を察知しながら冒険をする汽船、パイプの手綱をつけられた鋼鉄の巨大な馬のように線路のうえで足踏みをする胸板の厚い機関車、旗のように風にひるがえるプロペラが熱狂した群衆の喝采のように聞こえる飛行機の滑るような飛行を、われわれはうたうだろう。

われわれは、防ぎようのない火事のように暴力的なこのわれわれの宣言を、イタリヤから世界にむけて発信し、この宣言によって今日、「未来派」を創立するのであるが、それは、教授、考古学者、観光ガイド、骨董屋によるうす汚い腐敗からこの国を解放したいがためである。

すでにあまりにも長きにわたって、イタリヤは古物商の市場となってきた。われわれは、無数の墓場によってイタリヤじゅうをおおいつくす無数の美術館から、イタリヤを解放したいのだ。

美術館と墓場! ……得体の知れないたくさ

んの遺体が不気味に混在するという点で、まさしく両者はおなじものである。美術館、それは、嫌われたり無視されたりしてきた存在の横で、永久に人が休息するための公共の宿泊所。美術館、それは、画家と彫刻家が争いの場である壁にそって、色彩と線とで傷つけあって残酷な殺し合いを演ずる愚かな屠殺場!

ちょうど万聖節に共同墓地に行くように、年に一度巡礼に行くのであれば、わたしはそれを認めよう。年に一度、(ジョコンダ)(モナリザ)に献花されるのであれば、わたしはそれを認めよう……しかし、われわれの悲しみ、われわれの軟弱な勇気、われわれの病的な不安の行きつく先が、毎日の美術館通いであれば、わたしはそれを認めない。なぜ毒されなくてはならないのだろうか? なぜ腐敗しなくてはならないのだろうか?

一枚の古い絵のなかには、自分の夢を完全に表現するという願望に立ちはだかる越えがたいバリアを、壊そうともかく芸術家の労苦以外に、いったい何が見えるだろう? ……古い絵を賞賛するということは、われわれの感受性を遠く創造と行動の荒波に投射するかわりに、それを檻のなかに注ぎこむことに等しい。

つまり諸君は、むなしくも永遠に過去を賛美することで必ず消耗し、落ちぶれて足蹴にされることになるのに、それでも諸君の最良の力を浪費したいのだろうか?

わたしは実は諸君にこう明言したい。毎日の美術館、図書館、アカデミー通い(むくわれぬ努力の墓場、夢が十字架にかけられているゴルゴタの丘、切断された跳躍の登記所! ……)が芸術家にとって害があるのは、両親の長すぎる保護が、才能と野心に酔う若者にとって害があるのとおなじである。死にそんな人、病人、囚人にとっては、未来は閉ざされてい

るので、賞賛すべき過去がおそらくわれわれの香油となることもあろうが、われわれはそれについては何も知りたくはない、われわれは強く強い未来派なのだから!

だからこそ来てほしいのだ、指を黒く染めた陽気な放火犯たちに! ほら彼らだ! 彼ら……美術館を水浸しにするために運河に水を注ぎなすれ! ……おお、栄えある美術館が色褪せてずたずたになり、水面に浮かぶのを見るのはなんと愉快なことか! ……はしと斧とハンマーを握り、こわして、められてきた街を容赦なくこわして!

われわれのなかで最年長が30歳である(フィガロ版では、「最年長の者でも30歳に達していない」。以下に繰り返される箇所はわれわれの事業を遂行するため、われわれは少なくとも10年残されている、われわれは40歳になったとき、われわれよりも若い人たちが、われわれをいらなくなったかのように屑籠に捨ててくれればよい、われわれもそれを望んでいるのだ!

われわれの後継者がわれわれに何をやるだろう。彼らは遠くから、そしていたるところから、やってくるだろう。はじめてうたがった愉快なリズムにあわせて踊りながら、鉤形の指を伸ばし、アカデミーの扉の前で図書館のカタコンベ行きがすでに決まらぬわれわれの腐敗した精神のうまそうな匂いのように嗅ぎ分けて、彼らはやってくるのだ!

しかしわれわれはそこにはいない……彼らは最後に——ある冬の夜——とした野原のなか、单调な雨に打たれたい星根の下でわれわれをみつけたらわれわれの震える飛行機の横にうずくま

ずばらしい焚き火に、手をかざして暖めようとしているわれわれをみつければいい。その焚き火は、今日のわれわれの本が、舞い上がるわれわれのイメージの下できらめきながら燃えてできるものなのだ。

彼らは苦悩と軽度のためあえぎながら、われわれのまわりで騒ぎだてるだろう。そしてわれわれの傲慢な態度、妥協を知らぬ不敵な顔つきに——そういふなら、彼らの心がわれわれへの愛と賞賛で静いしるほどにおさえがたくなる理想につきうごかされて、われわれを驚かさずとびかかってくるだろう。

力強く健全な不正が彼らの目のなかで輝き、腐敗するだろう。事実、芸術とは、暴力、残酷、不正でしかありえない。

われわれの最年長が30歳である。とはいえず、すでにおれわれは宝を浪費した。力と愛と、勇気と、技術と、粗野な意思の千の宝を、さっさと急いで散らさず、またためらわず、休まずに息をさらしてわれわれはばらまいた! ……われわれを見てくれ! われわれはまだ腐敗してはいない! われわれの目は、火と熱と速度を糧としているから、疲れなどまったく感じないのだ! ……諸君は驚いてい

るのか? それももっともである。諸君は自分が生きてきたことさえおぼえていないのだから! 世界の頂点に立って、われわれはもう一度、星に対するわれわれの挑戦をぶつけよう!

諸君はわれわれに異をとるのか! ……もういい! 十分だ! それがどんなものか、われわれは知っている……われわれは理解している! ……われわれの美しく偽りにみちた知性は、われわれがわれわれの祖先の延長線上にあり、その要約にすぎないことをわれわれにはっきりと告げている。おそろく! ……そうかもしれない! ……だがそれがどうした? われわれは耳をかそうとは思わない! ……こんな破廉恥なことばをわれわれに繰り返す者に災いあれ! ……

諸君、頭をあげよ! ……

世界の頂点に立ち、われわれはもう一度、星に対するわれわれの挑戦をぶつけよう!

F.T.マリネッティ

(ミラノの「ボエジーア」誌、1909年2月、3月号より。同誌には1909年2月20日「ワ」の「フィガロ」紙に発表されたフランス語版の宣言も収められている)